

2019年10月20日 川越教会

深みからの叫びを

丸山 勉

【聖書】 詩編 130 章 1～8 節

【都に上る歌。】

深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。
主よ、この声を聞き取ってください。
嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください。
主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら
主よ、誰が耐ええましょう。
しかし、赦しはあなたのもとにあり
人はあなたを畏れ敬うのです。
わたしは主に望みをおき
わたしの魂は望みをおき
御言葉を待ち望みます。
わたしの魂は主を待ち望みます
見張りが朝を待つにもまして
見張りが朝を待つにもまして。
イスラエルよ、主を待ち望め。
慈しみは主のもとに
豊かな贖いも主のもとに。
主は、イスラエルを すべての罪から贖ってくださる。

【序】 ひと言「神様！」と呼べた喜び

私が FEBC で勤務を始めて何年目かの時に、当時鎌倉雪ノ下教会で牧師をされていた加藤常昭先生が、「祈り」というシリーズの番組を FEBC のスタジオで収録をされ、私もそれをすぐ傍でお聞きする機会があったのですが、加藤常昭先生がその番組第一回目でこの様なエピソードをお話されていたのを今も忘れることが出来ません。

加藤先生が、ある求道中のご婦人の方に、この様に言われたと言うのです。

「先生はよく「祈りなさい」と言われる。信仰を求め、神様を求めるということは、それ自体祈りなのだから祈ってごらんと言われる。しかし、どうやって祈ったらよいのか分からなかった。ところがある時、どうしようもない思いに捉われ、促されるようにして、ひと言「神様」と呼んでみました。そうしたら、言えたのです。私、「神様」と呼べたのです。」

そう言われると同時に、その方の目から涙があふれてきたと言うのです。神様は、

そのようにして、人間が、ひと言でもよい、「神様」と呼びかけ祈ることを待っておられる、それが私たちの中に「**信仰**」が生まれるという時なのだ、ということを加藤先生は語っておられました。

私たちは「祈り」と言うと、「どう祈ったらよいのか」ということに気持ちが行ってしまいます。そして周りの人が気になります。それは皆経験していることだと思います。けれども、祈りの本質というのはそういうことではない筈です。祈りはテクニックでも、誰かに聞かせるためのものでもなく、もっと根本的な、「**私と神様との関係**」そのものが「祈り」なのだと思わされます。

[1] 人生の「**途上**」と詩編 130 編

今日読んで頂いたこの詩編 130 編も、先週味わった 121 編と同じように「**都に上る歌(都詣での歌)**」の一つです。この作者は、或いはこの作者に代表される信仰共同体は、立ち止まっているのではありません。まことの神様に見(まみ)えるために、エルサレム神殿へと**歩みを進めている途上**で、この詩をうたっています。このことは意味があると思いました。私たちも同じです。私たちも「**旅**」をしているのです。私たちは生きている限り、「**旅の途上**」です。

その「**旅の途上**」は、どうでしょうか、楽しいことの連続などということはまずありませんね。そうであればかえって人間を浅くしてしまうでしょう。むしろ、真面目に生きようとすればするほど問題にぶつかります。途方に暮れることがあります。また、喉がカラッカラに渴くような**自責の念、自分の至らなさ、自己嫌悪**といったものにぶつかることがあるのではないのでしょうか？ もちろん、私にもそういうことがありました。そういう時に人はどうするか。すぐに絶望してしまわずに「時を待つ」ことも大切かもしれません。しかし、もしかしたらそれは“やり過ごして”いるだけなのかもしれません。根本的な解決にはなっていませんよね。

この詩編 130 編の作者も、今、人生のどん底と思えるような所に立たされているのです。しかしその中で彼は、時というものに身を委ねたり、やり過ごすのではなく、**その只中でまことの神様に向かって目を上げて**いるのです！そして、言います。130 編 1 節。

「**深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。**

主よ、この声を聞き取ってください。

嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください。」

「**深い淵**」のさらに「**底**」から、**神様の名を呼んでいる**というのです。**全くの暗闇**ということでしょう。人は実際にはそんな場所にいたら、前に進もうにも進めません。この「**深い淵**」という言葉は、実は詩編 69 編 3 節の言葉と同じだそうです。69 編の 2 節と 3 節をお読みしますと、こうなっています。

「神よ、わたしを救ってください。大水が喉元に達しました。わたしは深い沼に入り込み、足がかりもありません。」—この「深い沼」（新改訳では「深い泥沼」）が、「深い淵」と同じ語です。

深い泥沼にひとり嵌まり込んでしまったら、一体何が出来るのでしょうか？ 「叫ぶ」だけではないでしょうか？——「叫ぶ」時、私たちは神様を呼んでいるのだと思います。神様という方を知っている、知っていない、ということを超えてです。

[2] 神様は罪人の叫びを待っておられる

私は最近、森有正氏（キリスト者の哲学者。1976年にパリで客死）のこのような文章に出会い、とても考えさせられています。森有正は、フランスの哲学者ブレーズ・パスカルの研究者でもありましたが、そのパスカルの言葉を借りて、人間にとって神とは、人間が「呻きつつ求めるほかない」神なのだ、ということを行っています。何故、神様を呼ぼうとすると、呻きとなる、いえ、呻きとならざるを得ないのでしょうか？——人間は、神様の前に出ることを本質的に恐れる存在なのではないかと思えます。おかしい言い方かもしれませんが、ルンルン気分で神様の前に出られると思ったら、それはどこか違うのかもしれない。

旧約聖書「イザヤ書」の中で、預言者イザヤの召命の場面（イザヤ書6章）、神様の御座の前に出、主のお姿に触れた時にこのように言いました。

「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、私の目は王なる万軍の主を仰ぎ見た。」（イザヤ 6:5~6）

ここには、人間存在というものが、神様の前にとても立つことなど出来ない罪に汚れた存在だということが示されていると思えます。それは「人間の側から見た」認識です。正しい認識、誠実な認識です。

けれども、先ほどの森有正は、こうも言うのです。神様とは、私たちが「呻きつつ求める時、それはすでに（私たちが神様に）見出されている」、そういう神様なのだ。これは本当に素晴らしいことではないでしょうか！ こう言い換えることも出来ると思えます。神様は深い淵から私たちが叫ぶことを待っているのだ、と。罪人の叫びを喜んで待っておられるのだ、と。事実、先ほどのイザヤも、自らが汚れた者であるという認識に立ち、叫んだ直後に、彼の許に御使いがやってきて、燃えた炭火を持って彼の口に触れ、「見よ、これがあなたの口に触れたので、あなたの咎は取り去られ、罪は赦された」と語られました。罪におののいた者だからこそ実感出来る、感謝出来る神様の一方的な赦しです！これが、イザヤのその後の「わたしを遣わしてください」（6:8）という、主のために生きる召命に繋がったのです。

詩編 130 編の詩人にも同じことが起こりました。深き淵から神様に叫んだ彼はこ

う言いました。

「主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら 主よ、誰が耐ええましょう。

しかし、赦しはあなたのもとにあり 人はあなたを畏れ敬うのです。」(3~4 節)

彼の罪は赦されたのです！ しかも本来、人を裁くべき力ある神様によって！

これは、ひねくれた見方をすると、神様がまるでパワハラのように自分の力を見せつけて、力弱い私たちを奴隷のようにするということなのではないでしょうか？「だから宗教は嫌だ」と云う声が聞こえてきそうです。しかし、そうではありません。

G・A・F ナイトという人の『詩篇』の注解書 (The Dayly Study Bible) にこのようなことが書かれてありました。

「神は単に悪に抗うことはしない。というのは、悪は抗うべき“もの”ではないからである。悪とは、正道を踏み外した行為である。それゆえ神は、かかる行為を、創造的行為に転換させようとするのである。神がそうするのは、罪人を愛することによって、彼を赦すことによって、彼に、自分自身との交わりを提供することになるのである」と。——つまり、神様は人間を罪や悪あるままで受け入れると言うのです。どうしてか。神様は人間を知り尽くしておられると共に、その人間を、神様との交わりに生きるように造り変えて下さるお方だからと言うのです。私は本当にそうなんだと思いました。神様は、ご自分が創造した人間が神様に背を向けて樂園を去って行った時にも、「あなたはどこにいるのか」と探し、自ら声を掛けられたお方なのですから！（創世記 3 章）

この詩編 130 編の詩人は、神様を深い所から呼ぶことができた時、それ自体が神様との交わりであり、救いだったのです。「深い淵」にありながら、もう孤独ではなくなったからです！「孤独」。そう、自分で自分を救おうとすること、それが孤独なのではないでしょうか。そこから神様は、私たちを引き上げて下さるのです！ですから、この作者はうたいます。

「わたしは主に望みを置き わたしの魂は望みを置き 御言葉を待ち望みます。

わたしの魂は主を待ち望みます

見張りが朝を待つにもまして 見張りが朝を待つにもまして。」(5~6 節)

彼は、人生という巡礼の旅の途上において、自分ではなく、主というお方と、その方が語って下さる御言葉を待ち望んで生きる生き方へと変えられました。彼にとっては、昨日を引き摺らない、夜の闇が、朝日の到来と共に消えるように、神様の赦しを確信して、今日も歩み出すのです。

[結] キリストと共に「詩編」を祈り、歌う

週報にもお書きしたのですが、「詩編」は、祈れない私たちに祈る言葉を与えてくれるものです。「祈れない時は詩編を読みなさい」というのは本当です。他の箇

所は読めなくとも、詩編は読めるのです。ある神学者は、「詩編とは、キリストの祈りだ」と言いました。(ボンヘッファー)。時代も違いますのでちょっと驚くような言葉ですけれども、そのように信仰的に、或いは靈的に受け止めることはとても大切なことだと思います。

主イエス・キリストは、十字架の上で「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになるのですか」と叫ばれました。これは、詩編 22 編の冒頭の言葉です。恐らくこれ以上に「深い淵の底」はありません。神の独り子であるお方が、「神様に捨てられる」という絶望を経験されたのです。主イエス・キリストは、この深き淵を、全くの闇を体験されたお方です。——これは、私たちの闇を、ご自分の闇として引き受けられたということではないでしょうか。又、神様に裁かれるその裁きを、私たち罪人に替わって受けて下さったということではないでしょうか。人はこれを「都合の良い、虫のいい話」と言うかも知れません。しかし、聖書が告げるこの事実がない限り、「主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら 主よ、誰が耐ええましょう。」と言わなければならない私たちなのです。そのことを心に留めましょう。そして、私たちが「深い淵」「泥沼」から祈る時、その時、キリストも私たちに声を合わせて祈って下さっていることを信じましょう！キリストは、私たちのために、最も低い馬小屋のまぶねに生まれて下さったのです。

そして、私たちは礼拝の度ごとに、神様に向かって讚美をささげます。それ自体が私たちの救いの証です。それは私たちの口を通して、神様の救いを述べ伝えていることです。この詩編 130 編の最後の節の言葉を、今、イエス・キリストの十字架の贖いを知らされている者として「アーメン」と言えることは何と幸いなことでしょうか。

詩編 130 編の最後の節を読んで、お祈りしたいと思います。

ここで「イスラエル」となっている言葉は、今私たちはこれを自分への御言葉として聞くことが出来ます。

「イスラエルよ、主を待ち望め。

慈しみは主のもとに

豊かな贖いも主のもとに。

主は、イスラエルを すべての罪から贖ってください。」(7~8 節)

アーメン。

お祈り致します。